「武器学校と予科練」

海原会顧問　六車（むぐるま）　昌晃（まさてる）

第三十五代武器学校長兼ねて土浦駐屯地司令の職を昨年十二月二十二日付で後任の坂本陸将補に委ね、四十一年余の陸上自衛官生活を終えました。

在任間、菅野理事長を初め海原会の皆様には駐屯地隊員一同大変にお世話になりました。心から感謝申し上げます。ありがとうございました。ご縁がありまして、この度海原会の会員として名を連ねさせて頂くことになりました。宜しくお願い致します。平野事務局長からのたってのご依頼があり、この度投稿させて頂きました。

私は武器学校の所在する土浦駐屯地に予科練がかつて存在していたことを大変有り難く思っています。他方で、予科練と武器学校にどのような接点があるのか、海軍と陸上自衛隊、航空部隊と地上部隊、戦闘職域と補給整備職域など共通点は少ないと感じている人もいるように思えます。しかし、武器学校と予科練の関係は、単に過去と現在において同じ場所に所在していたというだけではないと認識しています。この地に予科練が所在し、多くの若者が立派な武人として育ち、我が国や愛する人を護るため戦ったことは他の自衛隊学校にはない、この上ない宝であろうと思います。数々ある貴重な宝のうち、特に三点をご紹介します。

まず、第一点目は、国を、そして愛する人を我が命に代えても護るという重い「責任、使命と覚悟」を持った先達を育んだ地であるということです。

自衛官の宣誓には警察官や消防官にはない「事に臨んでは危険を顧みず」と言う言葉があります。国を護るのは人です。高性能な戦車、護衛艦、戦闘機、ミサイルがいくらあっても、これらの装備品を運用し、維持する優秀な人材がいなければ我が国を防衛することはできません。補給整備においてもしかりです。どれも専門的であり、他方、自衛隊入隊時に必要な知識・技能を有している人は我が国にはいません。このため、我が国防衛の基本の一つが人材育成です。

学校は教育機関であり、基本的な知識・技能を習得させています。しかし、人材育成で知識・技能の習得以上に重要なことが責任感・使命感・協調性・規律心・団結心などの資質の涵養であり、自己の鍛錬の習性化です。

教官・助教が自衛官としての魂を情熱をもって注入することは勿論のこと、同期生相互の錬磨、更に重要なことは自己の鍛錬を習性化することです。鍛錬と言う言葉は元々は刀鍛冶による日本刀作成の工程であり、「鍛」は熱して叩くこと。「錬」は折り曲げて伸ばすことを意味します。宮本武蔵の五輪書には、鍛錬について「千日の稽古を鍛、万日の稽古を錬という。」と記されています。千日は約三年。万日は約三十年です。鍛錬は一生涯かけての修養であり、入校間だけでなく、生涯の習い性とすべきです。このため、電撃が走るような強烈な体験により自学研鑽のスイッチを自ら強く押し入れ、あらゆる困難を克服して自己の鍛錬を継続する、すなわち自己鍛錬の習性化が重要です。

この重要なスイッチの一つが「雄翔館」の研修です。同じような年齢の先達が如何に自らを鍛錬し、責任感・使命感を養い、覚悟を決め、実戦に望んだのか、多くのことを学べるのが「雄翔館」であり、予科練習生の先輩方が自らの命と引き換えに残された貴重な経験や言葉は正に至宝です。昭和二十五年の警察予備隊発足以来、陸上自衛隊は戦闘を経験した隊員はおらず、実戦を通じた宝を永久に伝えていくことが必要です。また、単に展示物として継承するだけではなく、日本の青年、特に自衛官の魂として先輩から後輩へいつまでも引き継いでいくことが極

めて重要だと思います。
「雄翔館」には部外からだけではなく、毎年全国の部隊から各学校に入校した学生が来ます。そして、武器学校入校学生や研修に来た学生は多くのことを学んで帰り、自衛官としての階段をまた一段、二段上がって営門を出て行きます。陸上自衛隊の各学校の中で、戦後に開設された駐屯地に所在する学校は勿論のこと、「雄翔館」、「雄翔園」のようにきちんと整備された場所は他にはありません。正に自衛官としての精神修養の場、道場における宝です。

次に、第二点目は、武器科のメッカであり、武器科隊員としての支援精神を学ぶ道場である武器学校にとって、予科練の先輩は活きた教材だということです。先に述べた第一点目は自衛官として共通する事項ですが、予科練は武器科隊員にとっても欠かせない存在です。

令和元年八月二十三日、市ヶ谷での陸幕長への申告後、直ちに土浦駐屯地へ向かいました。営門で警衛隊の敬礼を受け、真っ先に向かったのが、雄翔園にある予科練の慰霊碑二人像です。献花を済ませた後、雄翔館を研修しました。この時に、目に留まったのが、人間魚雷「回天」の訓練中に、整備ミスが原因で沈没し、殉職した矢崎美仁二飛曹の話しでした。

我々武器科隊員は、一般に自衛戦闘として敵と戦うことはあっても、普通科隊員や戦車乗員のように直接敵と対峙して戦うことを生業としていません。第一線部隊の隊員は、我々が整備し、点検した装備品と補給した弾薬に全幅の信頼を寄せて、戦いに臨みます。機甲生徒出身で、陸曹時代に戦車部隊で勤務していた私は、命の懸かる戦いに信頼できない装備品・弾薬では臨めないことを良く知っています。平時の射撃競技会ですらそうですから、有事では尚更です。国家存亡の時に、実戦を前にした訓練において整備ミスで殉職された矢崎二飛曹はどれほど残念で悔しい思いをしながら亡くなったのか、痛いほど伝わりました。この想いを必ず教育に反映しなくてはならないと誓いました。

武器科装備の整備や弾薬類の補給等、武器科支援の良否は、第一線の部隊・隊員の自信や士気を左右し、戦闘結果に重大な影響を及ぼします。引き金を引いても発射しない。射撃しても狙ったところに弾着しない。アクセルを踏んでも加速せず、ブレーキを踏んでも停止しない。こんな装備品では戦えません。

武器学校の技術教育で必要なのは、知識・技能ばかりではありません。整備や補給等の支援を通じて、第一線部隊の指揮官や隊員に必勝の信念と手段を付与するのが、武器科隊員です。

「単に時間までに整備作業を終えた。要求された弾薬を交付した。」では甚だ不十分です。第一線部隊の指揮官や隊員が不安を覚えるようでは支援任務を全うしたとは言えず、ましてや身の危険を覚えることはあってはならないことです。武器学校の教育では武器科の若い幹部・陸曹に、第一線部隊の指揮官や隊員のために、如何に厳しい状況においても決して諦めず、いささかも手を抜くこと無く、やるべきことは必ずやり、やってはならないことは決してしない、させないということを叩き込むことが重要です。

その後も矢崎二飛曹の事故が頭から離れませんでした。そこで、目で見て、感じてもらい、安全管理を始め、武器科支援精神を学ぶ場として、第二教育部に「安全管理資料室」を令和二年四月に開設しました。多くの学生が教育の一環として同資料室を研修しています。装備品や整備に起因する各種事故の絶無に繋がり、絶大な信頼を得る一助となれば幸いです。

さて、人間魚雷「回天」の整備ミスが原因で訓練中に殉職された矢崎二飛曹の話しには続きがあります。その後、予科練同期生の北村十二郎一飛曹が殉職した矢崎二飛曹の遺骨を抱いて、回天で出撃し、散華しました。この時の写真も「雄翔館」にあります。真の同期生愛とは何かを教えてくれています。この本

物の同期生愛も良き教材です。

最後に、第三点目は、武器学校・土浦駐屯地と地元の自治体・住民の良好な関係です。学校教育を整斉と実施するためには地元との良好な関係が不可欠です。旧陸軍・海軍の所在地の多くは地元理解が良いことが知られていますが、土浦駐屯地も例外ではありません。土日の射撃を伴う訓練に対しても苦情の一つもないことが良い例です。武器学校が立川駐とん地から移駐された際の大歓迎振りは、予科練が如何に素晴らしかったのかを象徴しているのでご紹介します。

今から約七十年前の昭和二十五年（一九五〇年）六月二十五日、朝鮮戦争が勃発し、警察予備隊が設置されることになりました。約一年後の昭和二十六年十月一日立川駐とん地に車両整備講習所が開設されました。その後、同地に総隊武器学校（仮称）の設立準備が開始され、昭和二十七年一月二十一日に立川で開校式が挙行され、総隊武器学校が開設されました。当初、火器修理、武器補給、弾薬技術、次いで装軌車整備、自動車整備のコースが設置されました。

当時、立川は米進駐軍の基地であり、狭隘でした。立川では米軍に対する厳しい視線がある上、近傍の繁華街は米軍人で溢れており、決して教育にふさわしい場所では無かったようです。

武器学校の移駐は、武器補給しょうが立川駐とん地からの霞ヶ浦駐とん地へ移転したことが一つのきっかけになったようです。当時、阿見町の第一海軍航空廠跡地では戦争中の空襲でボロボロになった施設が多数ありました。その跡地に武器補給しょうの移駐が決定し、昭和二十八年二月に霞ヶ浦駐とん地が開設されました。総隊武器学校の移転先を探していた担当者の目に止まったのが、霞ヶ浦駐とん地の目と鼻の先にある旧土浦海軍航空隊の跡地でした。当時、日本体育専門学校（現在の日本体育大学）が利用していましたが、武器補給しょうと武器学校が近くにあることは物の無い時代に大変便利であろうということ、また、日本体育専門学校も近々東京への移転が予定されていたことから決まったようです。

総隊武器学校の立川から土浦への移駐に伴い、昭和二十七年八月一日に土浦駐とん地が開設されました。当時の武器学校史には当時の阿見町、土浦市の地元の皆さんの大歓迎振りが残されています。

「立川より土浦への部隊移動前後における、阿見町、土浦市当局及び町民市民の歓迎振りは阿見町、土浦市そのものが、旧海軍の航空隊及び補給しょう時代から軍もしくはそれに類する部隊に対し、永らく脳裏に深く刻み込まれた感激から来る、憧憬が原因している様にも感ぜられた。無論純朴な町民、市民の熱狂的に振る旗、投げるテープには何等の邪心もなく、むしろその歓迎振りには立川時代のそれと比較して身に余る光栄と重責を深く感じしめられた。予備隊誘致に関して町、市当局の払った努力は決して少なくはなかった。」

また、昭和二十七年九月十六日付の新聞には、

『予備隊堂々の市中行進で移駐』

の見出しの下に、

「警察予備隊土浦駐とん部隊の土浦移駐は十五日午後一時、三個梯団に分かれ市内下高津町国立霞ヶ浦病院付近に集合、午後二時二十分歓迎花火が轟く市内を市の警察の警備車の先導で歓迎にわく土浦市の目抜き通り行進に移ったが二時三十分市役所前を通過する時は天谷市長ほか丁度そのとき市会協議会で集まっていた市議会議員達も出揃って出迎え、谷本武器学校長外隊員の乗車する車両五十台に万歳の嵐を浴びせかけ心からの歓迎振りを示した。前を通過する隊員も答礼をもってこれに応じ中心街の本町、祇園町を通過する時は予備隊歓迎のために道路の両側を埋めて居並ぶ市民達と色とりどりのテープを投げかける商店街の人々との熱狂的な歓迎を受けて堂々の市中行進を行い、市民に好印象を与えて阿見の同隊本部に入った。」

とあります。この大歓迎振りは、現在では想像もつかないも

のですが、それほど予科練や海軍がこの地域の方々に如何に信頼されていたかの証左であろうと思います。阿見町も土浦市も戦争末期には米軍の爆撃機や艦載機の空襲を受け、多くの人が犠牲になっています。特に昭和二十年六月十日の阿見大空襲では、武器学校の近くの鹿島神社では防空壕が爆撃を受け、三百七十人を超える犠牲者を出しています。予科練生の負傷者や死者は、民家の戸板で土浦海軍航空隊適性部（現在の土浦第三高等学校）へ運ばれて治療を受け、また荼毘に付されたと言われています。このように多くの犠牲者が出ているにもかかわらず、地元の信頼感が失われることはありませんでした。武器学校・土浦駐とん地は、予科練から引き継がれた地元の信頼という宝を大切に守り、発展させていかなければなりません。